



著 名無しの東北県人

表紙イラスト Blue_Gk

ナチス怪獣大決戦

【ネロハイドラ襲来】

怪獣大決戦

UTSUTENKAI
presents

ネロハイドラ

INVASION OF NERO-HYDRA

襲来



ナチス怪獣大決戦 ネロハイドラ襲来

文:名無しの東北県人

イラスト:Blue_Gk/黒ノ樹/sigama

ウツテンカイ

**登場人物
&
クリーチャー
&
メカニック**

ソフィア・マリューコヴァ — キャラクターデザイン





レベッカ・ストロングホールド



怒り



笑み



絶望





背面タトゥー



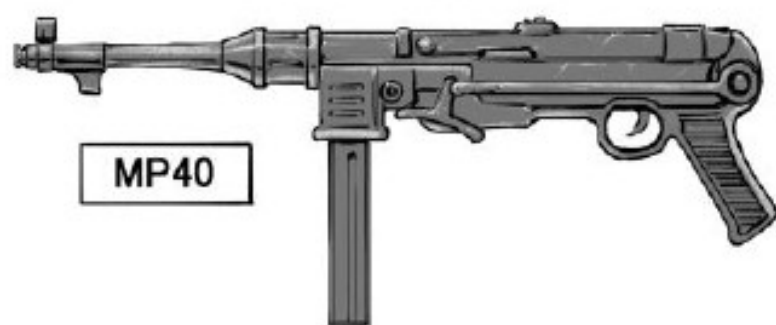
エンブレム



全身



パンツァーファウスト



MP40

イルザ・ヴァレンシュタイン — キャラクターデザイン





プロトサメ人間

前



後



ポーズ



顔



サメ人間

前

後



面

開



閉

十
〇〇

〇〇〇



ネロハイドラ

全身



頭部



触手先端



火器人間

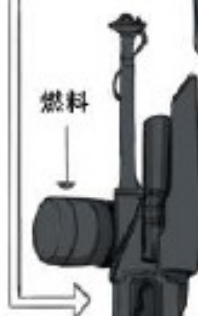


前面

ロケット弾倉



燃料



横



背面



◆一九四六年六月六日

「これは文明人と野蛮人の戦いなんだ。ロシア人全員をウラルの山奥に送り返すまで終わらない……」

レベッカ・ストロングホルド少尉はキューベルワーゲン^{注1}に揺られつつ、その助手席から窺える光景を見て痺づいた。右側しかない彼女の視界には、昨年九月、メツェ・コマーロム村で目撃したものと大差ない地獄が広がっている。

現在ドイツ軍は、グラン橋頭堡と呼ばれるハンガリー北部のソ連軍突出部への攻勢に出ている。バラトン湖周辺と違って比較的手薄なこの地域を狙う作戦にはケルンとラープを経由して西部戦線から遠路遙々やってきた機甲部隊も参加しており、整備の行き届いた状態で恐るべき猛威を振るっていた。

『ヨーロッパ東部における大いなる戦い』

しかしドイツ軍上層部がそう呼ぶハンガリーでの戦闘は、バーベルスベルクの

映画製作所然とはしていない。縄で枯れ木に吊るされた少女の死体は生臭い風で延々円を描き、足下では飼い主を失った犬や豚が焼け焦げた人間の手足を啜えて彷徨っている。やや後方には、上下逆になった馬車数台。かつてウィーン裁定によってこの国に割譲された旧南スロバキアのケベルクート村には、人間の悲惨・傲慢・愚劣がこれでもかと詰め込まれている。

何も変わってはいないのだ。

ハンガリーにおいても同様な、東部戦線の泥沼化した状況も。

バラトン湖畔から南東に三十六キロ、ザルビッツ運河とシオ運河^{注2}の合流地点に存在するソ連の決戦機動要塞都市ことメカソフィアシティがモレク宜しく人命を吸い込み続けていることも。

『事実よりも、自らの信念を態度で示す方が重要である。自分の行動は、未来に反共の模範を示すために必要なのだ』

ソ連軍との戦場で失われた左目を眼帯で覆っている浅黒い肌の人物は、続いて

解放されたハンガリー人女性らが、棒切れのようになった四肢と妙に膨れた腹の赤ん坊を掲げている様子を口の当たりにする。刹那彼女はロンドンで何の目的もなく生活していた頃、モスクワ前面におけるドイツ軍の歴史的敗北を知るや否や共産主義と戦うべく単身渡独した俺はやはり間違っていなかったと確信せずにはいられなかった。ヨーロッパに住む全ての^{注3}子供が、死後あのような姿で不規則に頭を揺らさずに済むようイギリス自由軍団に身を投じたのだ。

「それでもなお捕虜を作ったのは、我が軍の規律を証明するものである！」

村の一角で停まったキューベルワーゲンを降りた時、レベツカは友軍の兵士がJS-2重戦車の残骸の前に捕虜^{ソ連兵}を跪かせている光景を口撃した。

「撃て！」

連日非人間的な経験を重ねたが故に口を落ち窪ませ、澱んだ眼差しをしているフオルク軍曹が命令すると、居並ぶ彼の部下から七・九二ミリ弾を浴びせられた捕虜^{ソ連兵}は一切の例外なく頭部を血生臭い塊に変えられる。捕われた敗北者達の前に

横たわっていたのはいつも通り死だけであつた。

「パトリシア・アベ……^{ハーフ}雑種か？」

レベツカは一仕事終えた仲間を労いつつ屍に歩み寄ると、抉り出された眼球や切り取られた耳鼻が無数に転がる地面から認識票を拾い上げて舌打ちする。この橋頭堡に展開している敵はキーボルク大隊だ。^{注4}口系アメリカ人の女性兵士が所属しているソ連軍部隊など一つしか存在しない。

「さっさと焼いちまえ。こんなもんヨーロッパに残しておくな！」

物言わぬ骸が火炎放射器で焼き払われるのを尻目に再び歩き出したレベツカはやがて、ここまでキューベルワーゲンを運転してきた兵士の案内で薄汚い小屋に辿り着く。

「……ッ」

木の扉が軋みつつ開かれた瞬間、中から溢れてきた強烈なる腐臭でレベツカは思わず顔を背けてしまう。

「これです」

兵士が指差した先にあったのは布を被せられた何か。浮かび上がった幾つもの濃い染みに、揃って喧しい羽音を立てる蠅が集っていた。

「俺が呼ばれる訳だ……」

兵士の手が布を払い、視覚と聴覚でぬめった糸と不快極まる粘着音をそれぞれ確認したレベツカは暗澹たる気分になる。

「あの女は^{ソフィア}まだ殺し足りないのか……？」

昨年は^征シオー^ブフ^ロク^ジへの撤退戦やアルト^エウル^ク・^トシュー^キミ^ーツ^ボルの惨劇、今年はドラウ^征フゲン^服ガー作戦を生き延びたレベツカは敵地単独潜入の特例的許可に加え、対怪獣のオブザーバーという役割までも今や与えられていた。今回一人この地に馳せ参じたのは、グラン橋頭堡にて『痕跡』が発見されたからである。

どうせ誤認だろう。

忌まわしき怪獣経験に起因する希望的観測が過分に含まれたレベツカの考えは

今この瞬間、見事に打ち砕かれていた。

何故なら彼女の前にあったのは今までに見たどの怪物とも異なる、竜のような赤い頭だったからだ。

注1 ドイツ製の小型軍用車両。オープントップの車体を持つ。

注2 犠牲を要求する占の神。

注3 武装親衛隊のイギリス人部隊。

注4 メカソフィアシティに駐留するソ連軍部隊。



「我々が可能性として考えていたのは、もっとミクロな生物学的汚染だった」
端末を通じて白室からサルコファガスのデータベース^{注1}を検めていたプロトサメ

人間は、解決しようのない煮詰まりを感じて席を立った。

「だが実際はこの通りだ」

窓前に移動して初めて、端正な横顔を持つプロトサメ人間はバラトン湖西岸に存在し、バラトンフュレドの旧名を有するドイツ軍の拠点——シャーリン鯨林寺に夜の帳が下りていることを知る。

「どこから来たんだ……？」

グラン橋頭堡から腐敗し切った怪獣の頭の写真が届いた後、プロトサメ人間はげるまんスーパーアリーナの白室で調査を進めていたが、最高位のアクセス権を用いても有益な情報はヒットしなかった。入ってきた諸々を精査した末に確証を持てたのは、ネロハイドラなる名前のみ。

「ん？」

指の第二関節がガラスを叩く音が聞こえたのはその時だ。

「そんなに面白いんですん？」



薄いガラスドアに濡れた裸体を押し当てて気付かれるのを待っていたイルザ・ヴァレンシュタインはシャワー室を出ると、痺れを切らした様子でバスローブを纏いながら問う。金の瞳と褐色肌、加えて茶の髪を持つ彼女は鮫林寺の統率者であり、同時に非人道的な人体実験を繰り返して数多くの改造人間や軍事用生物を作り出してきたマッドサイエンティストだ。

どういう訳か上半身がウバザメの頭部に変わっている老婆や、頭がなく首筋と右肘にサメの頭が付いている成人男性、果ては人魚宜しく下半身がサメになっている、両腕部がヒレの赤ん坊。ライトアップされて室内に立ち並ぶカプセル内の液浸標本は、全て彼女の作りし実験体である。

「申し訳ありません……イルザ様」

そして軍服の左上腕部にハーケンクロイツなしの赤い腕章を付けているプロトサメ人間はイルザの副官兼恋人であった。

「義務不履行には死と処罰ですん」

夢中で調査するあまりシャワーどころか、思い者の入室にさえ気付かなかったプロトサメ人間の前まで歩み出たイルザは鮫林寺のモットーを口走りつつ、つい十秒前に締めたばかりのバスローブの紐を解く。

「イルザ様……」

続いてバスローブそのものが木床に落ちると、プロトサメ人間は思わず生睡を呑み込んでしまう。何十回、何百回と見た裸体なのに、それはどうしようもなく煽情的で神秘性に溢れていた。

注1 げるまんスーパーアリーナの地下に存在する最重要区画。



「弾頭はナチ・チタニウム製。鋸人間^{注1}のチェーンソーと同じ材質です」

鮫林寺研究開発班の主任を務めるジークムントは現在、将校二人を伴って地下工廠を進んでいた。

『総統第一』

あちこちにゲル^根マン^軸体の文字でこう記されている場所では、日夜新兵器や先端技術の独自研究が進められている。

「誘導はジャミングされにくい有線方式を採用しました」

足を止めたジークムントは、ラックの上に置かれた新型ミサイルを将校二人に紹介する。イルザから『怪獣殺害くん』と名付けられた、メカソフィアシティの化け物を倒すための高性能誘導弾を。

「着弾後は目標の外皮を突き破り体内で爆発します。つまりは、怪獣を内側から破壊する訳です」

ジークムントは滞りなく大まかな説明を終えるが、将校の一人は怪訝な表情で「本当かよ……」と漏らしている。

「本当です！」

それに対し、実を言おうと自分も『怪獣殺害くん』についてよく知らない主任は力強い調子で一步前に入るしかなかった。

注1 ドイツ軍の改造人間。四本の腕にチェーンソーを装備している。



「いつもながら期限通りだね」

女性秘書からソフィア・マリユーコヴァの名前が記された入金明細のコピーを手渡されたJDはいつも通り、中立^{スイス}国の某所に聳える豪邸内の一室で微笑んだ。

「全く律儀だよ彼女は……」

大文学的な富と権力を生まれながらにして与えられたこの資産家は人が必死で

運命に抗う姿以外に一切興味がなく、それ故生きるため自分の小便を飲み、腐乱死体の頭を泣きながら切り開いて中の脳を貪り食ったソフィアを融資という形であつて支援した。そんな彼女からの返済は今日まで一度たりとも遅れていないし猶予を希望する時も早い段階で相談の連絡が来ていた。最終的に返済されるのであれば過程には興味がなかったが、ジョン・ドウに因んだ偽名を用いて暗躍する人物はその辺りに確かな好感を抱いている。

「しかし、すっかりソフィアも落ち着いたものだ」

入金明細のコピーを机の引き出しに収めたJDは葉を弄り始める。その口調は感慨深げであり、同時に寂しさを滲ませていた。

恐るべき熱情で自らの運命を切り開いたソフィアの姿は、今や記憶の中にしか存在しない。同情心の一片もない残虐非道の敵を蹴散らす中で強化化した彼女の軍勢は、今や何人たりとも叩けぬ領域まで行き着いている。

「すっかりね……」

ソフィアに送金していた頃はJDもソフィアの安定を強く望んでいたが、いざ実現してしまうと少なからぬ空虚さを覚えてしまうのは事実だった。

「そうとも言えません。こちらをご覧ください」

例によって、女性秘書は雇用主の胸中を察するなり書類を差し出した。

「素晴らしい！　まるでスラヴ神話のズメイじゃないか！」

紙面を受け取った瞬間から早口で捲し立てるJDに対し、女性秘書は引き続き淡々とした口調で進める。

「発見されたのはトビリシの近郊。恐らく——地球上の生物ではありません」

「やはり彼女は想像を超えていく……！」

実に嬉しそうに微笑むJDが、先程口にしたズメイ。

それは『竜』を意味していた。

◆一九四六年六月七日

「あつ……プロトおつ……」

汗の臭いで満たされたげるまんスーパーアリーナの一室には『鯨とは交尾する魚である』という、漢民族の優れた感性そのままの光景が展開されていた。

「イルザ様……ッ！ イルザ……様ッ！」

ベッドの上でイルザに覆い被さったプロトサメ人間は、汗びっしよりの肉体をひたすら前後させている。勢い良く腰が打ち付けられる度に両者の接点から汗と蜜が舞い、下から逞しい腰回りに両太腿を絡める女性将校は嬌声を響かせる。

時刻は午前三時を過ぎていたが、口を跨いで続く夜伽が終わる気配はどこにもない。それどころかギリシャの哲学者アリストテレスが紀元前四世紀に記録した光景を悪趣味に再現する交わりは、更にその淫靡さを増しつつあった。

「愛しています……っ……イルザ様」



正常位で相手を突く。プロトサメ人間は一旦抽挿を止めると、上半身そのものを叩き付けるかの如し勢いで口付けする。すぐに室内に響き渡る音は唾液まみれの舌同士が絡み合う、淫らなそれに切り替わった。

「ふああっ……んうっ……」

汗ばんだ額に髪を張り付け、左右の実も限界まで固くしているイルザは下から伸ばした両手で情人の濡れた頬を覆い、より激しく舌を絡ませていく。繋がったままのキス——プロトサメ人間と上下両方で溶け合う多幸感が、彼女の体全体を支配している。

「イルザ様……ッ……素敵です、本当に……っ！」

およそ一分後、今度はプロトサメ人間の尖った鼻先が匂い立つイルザの左腋に押し付けられる。正当進化形と違って人とサメの遺伝子比が七対三となっている彼はまるで貪り食うかのように頭そのものを動かして、ヒトのそれと大差ない舌で何もかも舐め尽くす。汗の滴も、毛の剃り跡も、全てを。

口を離したプロトサメ人間は続いてイルザの右乳首を左手親指及び人差し指で弄りつつ、問髪入れず左側のそれを頬張った。

「ふあっ——」

疾うに感度が高まり切っているイルザは思わず仰け反るが、プロトサメ人間は巧みな舌遣いと甘噛みを織り交ぜた妙技を構うことなく繰り出していく。

「はあっ……呼び捨てっ……呼び捨てにしてん……っ！」

それから二分経った頃、上限なき快感に悶えるイルザからそう言われたプロトサメ人間は、熱った肉壺に納まっている怒張が硬さを増すのを感じた。

「孕ませ……てんっ……！」

「わかった、イルザ」

潤んだ瞳に続いて言葉でもイルザが哀願すると、唾液まみれの乳首を解放したプロトサメ人間は両手で彼女の腰を掴む。そして、解放された『この雌を我が物としたい』という雄の本能に従って激しく腰を打ち付けていく。

「——ッ」

数分後、ベッドを突き破らんばかりの律動の末にプロトサメ人間が呻いた瞬間、陰茎の中を駆け抜けた白濁は猛烈な勢いでイルザの胎内に流れ込み、既に何度も満たされている空間の僅かな残りを埋め尽くした。

「かかって……るんっ……！」

この瞬間を待ち侚っていたイルザは、喉奥から熱い吐息を漏らしつつ充足感に打ち震える。染色体構造等の関係で、プロトサメ人間からどれだけ多くの熱情を解き放たれても着床には至らず受精止まりだ。だが、受精はするのだ！

「すっごく……濃いんっ……」

ゆっくりと引き抜かれる男根を恍惚の表情で見つめるイルザは、その先端から大きく上下する自分の腹に零れ落ちた滴を愛おしげに掬い取る。

「——あん」

それを指の第一関節ごと頬張った瞬間口内に生臭く苦い味が広がり、イルザは

自分の心が熱くなるのを感じずにはいらなかった。

「綺麗にしますん……っ」

あちこち染みだらけのシーツの上で身を起こしたイルザはすぐに屈み、呆然と大井を見上げている。プロトサメ人間の長い陰茎を咥え込む。お互いの蜜と白濁で酷く汚れた一物を、口で清めるために。

部屋に備え付けの電話が鳴ったのは、正にその瞬間であった。



「このままブダペストを奪い取れ！」

ハンガリー北部地域の突出部を除去することに成功したドイツ軍は今、パールカーニからマリア・ヴァレリア橋を渡ろうとしていた。目標はドナウ川を挟んだ都市エステルゴム。

「ベルリンまで押し返してやれ」

しかしエステルゴムにはグラン橋頭堡から撤退してきた敗残兵とメカソファイアシティから増派された援軍が布陣しており、彼らは時計の針が午前七時を指した瞬間、恐るべき鋼鉄の洗礼をドイツ軍に浴びせ掛けた。

対岸から降り注ぐカチューシャロケットは激しい飛来音と共に着弾して無数のドイツ兵を吹き飛ばし、続く衝撃波で欄干をも揺るがせる。それだけに留まらず直撃を受けた三号突撃砲は金属的な大音響を上げて炎上、弾かれたように開いたハッチから火達磨の戦車兵を何人も吐き出した。

「うわあああああああああああああああああああつ！」
ハンガリー人SS義勇兵のシニユイ曹長もその一人だった。ブダペスト出身の彼は路上に倒れ込むなり二度と動かなくなる。

「行け！ 総統と祖国のために死ね！」

しかし鋼鉄の火に鍛えられた東部戦線の闘士達は断末魔の叫び、喘ぎ、呻きが

硝煙臭い空気を震わせる世界をひたすら前進した。舞い上がった粉塵でマリア・ヴァレリア橋の周囲は早くも夕暮れの如し有様になっているが一切気にしない。

「まずいですよガクさん！　巻き込まれます！」

「日本のアレクサンダー・ワースに何を言う！」^注

戦慄すべき鉄の暴風の中を突き進むドイツ軍部隊には、遠く極東から同盟国の戦いを報じるべくやってきた日本人特派員とカメラマンの姿もあった。どちらも恰好はドイツ兵のそれと同じだったが、武器だけは携帯していない。

「えっ？」

半べそを掻きながらも決死の撮影を続けるカメラマン川広は橋の中間辺りまで達した時、レンズの向こう側で異変が起きているのに気付いた。エステルゴムを背にするような形で炎が輪郭を纏い、真っ赤に焼けた銃弾が飛び交う中で何かに変貌していくのではないか。

「サメ人間……？」

「違う！ 奴は赤くない！」

ドイツ兵は作戦開始の時点でキーボルカ^{注2}の米襲を覚悟していたが、現れたのは全く別の存在であった。

赤く硬質な外皮。

ゴムホースを加工して作ったかのような背中の棘。

下腹部から直接伸びる、先端にまた別の頭が付いた十数本の尻尾。

メカソフィアシティの新怪獣であるネロハイドラが遂にその姿を現したのだ。

「たかが竜だぞ！」

ドイツ軍部隊は霊長の座から蹴り落とされる恐怖を振り払うかのように突撃し、各々火器を撃ちまくるが、ネロハイドラは鋼鉄の熱い平手打ちを浴びてもまるで動じない。ただ足の裏全体をコンクリートに押し付けて歩行、全高三メートルの巨体をゆっくりと押し出すのみ。

ある程度進んでから立ち止まったネロハイドラの口が開いた刹那——炎の帯が

放たれる。それは射線上にいた歩兵を焼き払い、ケーニヒスティーガー重戦車を即時爆発させる。ハーフトラック^{半装軌車}に至っては、熱せられた鉛細工の如し有様へと変貌させられた。強烈な余波を浴びた橋の欄干も針金宜しく歪曲！

「畜生！ 畜生……ッ！」

その後再び進み始めたネロハイドラの前では悔しさを滲ませるフォルク軍曹を筆頭に焼け残った者が這い回っていたが、竜は飛んだり跳ねたりする訳でもなくその命を摘んでいく。そこに憎悪や怒りはなく、ただ邪魔だから取り除く以外の感情は見受けられない。

辛くも初撃を免れたドイツ兵の生き残りは寸土も譲らぬ心構えで煤汚れた体を文字通り肉弾防壁に仕立て上げたが、それは崩れ去る城の内側であらゆるものを非難し続ける専制君主と大差なかった。

一步一步確かな歩みを残すネロハイドラは引き続き、惨めかつ矮小な抵抗者を他愛なく殺し続ける。MG42軽機関銃の射手が反動でひたすら肩を泳がし、熱い

オイルの悪臭を振り撒きつつ前進したパンター中戦車二両が持てる火力の全てを叩き込んでも絶望は止められない。

半ばパニック状態のフランス人SS義勇兵クリストフに指揮されて迫る怪獣を狙い撃っていたナースホルン対戦車自走砲は炎を浴びて弾薬が誘爆。

「衛生兵——ッ！」

炸裂の後、両足を失って地上に激突したクリストフの絶叫は当然傷など付いていないネロハイドラの更なる火炎放射により沈黙させられた。

「タッパー、お前も『あれ』を見たのか？」

戦闘爆撃機M e 2 6 2を操りマリア・ヴァレリア橋に迫るヴォルクマン中尉は、自分達と怪獣の関係を呪わずにはいられなかった。妹の夫はブダペストにて、その従兄はセーケシュフェールヴァールで。みんな、こいつらのせいで命を落とした。

「借りは返すぜ」

アメリカで生を受けた後ドイツに移住した過去を持つヴォルクマンは妹の夫を

嫌ってはいたが、同時に彼の命を奪った怪物を憎んでもいた。故にここにいるし故に今、戦闘爆撃機をネロハイドラに突っ込ませている。

『撃ち殺せ』

そんなヴォルクマンが機体ごと焼き払われるのと前後して、今度は火器人間が三休投入された。四眼式のカメラアイを持つ殺人機械はネロハイドラに向かうと三連装ガトリング砲を猛連射、マシン特有の恐るべき正確さで一発の漏れもなく頭部を攻撃する。だが三十秒間に二万七千発もの弾丸を叩き込んでも、そもそも皮膚を貫けなければ意味がなかった。

「ロケットに切り替えろ！」

火器人間はドイツ兵の指示に従って攻撃手段を変更するが、どれ位の威力かと問われれば戦車一台飛ばす位だと性能で応えるロケット弾も一切効果なし。ただ赤い外皮の上でむなしく爆散するのみだ。

その後火器人間さえも撃破したネロハイドラは一步を踏み締める度、足の裏で

真新しい肉塊を破裂音と共に四散させながら進み続けた。重傷者の悲鳴が湿った響きに上書きされる光景はとても止視できるものではなかったが、竜の顔からはやはり何も伺えない。

ネロハイドラにとって、人間とは虫に等しき存在だった。

たった一人……『母親』ソフィアを除いては。

注1 ロシア生まれのイギリス人従軍記者。

注2 メカソフィアシティが保有するサイボーグ怪獣。三号機まで存在する。



首都ブダペストから南五十キロに位置するシモントーニャの周辺は一見すると緩やかな起伏が連なる草原だが、実際には小規模な沼沢や水溜りだらけの湿地帯

である。全周を対爆コンクリート防壁で取り囲んだソ連の決戦機動要塞都市ことメカソフィアシティは、そんな場所に存在している。

「ドイツ人よ、これを以^もって鑑とせよ」

その地下司令部で大型モニターと向き合うアノニマは、およそ百四十キロ南で大暴れするネロハイドラを見守っていた。

「トビリシ生まれの血は熱い……」

左胸に赤い星が描かれている黒のマイクロビキニ姿、猫耳めいた髪飾りが付く銀髪、そして端正な顔を持つスペクター^{注1}のすぐ横にはもう一人いた。

「これが煮え滾る時は特に大変……」

真紅の双眸、艶やかな黒髪、うっすら浮いた腹筋を露出させている、改造したソ連軍の将校用制服——他でもないソフィア・マリューコヴァだ。

スペクターとしての特殊能力を何一つ持たぬ代わりに比類なきバイタリティを有し、事実上の国家運営や経済基盤の安定、独自勢力としての生存圏確立までも

成し遂げた精神的超人である。

『自我に目覚めたロボットが巨大化するように、女同士で子供を作れないのなら女同士で怪獣を作ればいい』

こう思うことで女であるが故『装具帯の恋』で結ばれているアノニマとの間に子供を成せぬという絶望に抗ったソフィアの代償行為こそ、ハンガリーにおける恐るべき怪獣大戦争の根幹だ。

「全てを守らんとする者は何も守らず」

ドイツ人に対する嫌味としてプロイセン王フリードリヒの古い格言を口走ったソフィアは、グラン橋頭堡を無理に守るつもりは元々なかった。彼女にとっては問近に迫った新しい^{ネロハイドラ}子供のお披露目は何よりも重要だったのだから。

「ネロハイドラ！ そのネアンデルタール人を全て燃やしなさい」

ソフィアの指示に従って引き続きドイツ兵達を焼き払うネロハイドラについて^{スタック}最高総司令部が知っているのは、ただ「敵ではない！」という理由で責任の対価

としての自由行動を認めている事実上の独立国家がファシスト共を殺す新怪獣を
使役し、少なくとも自分達にはその牙を当面向けないことだけ。

この怪獣は元々地球上には存在しておらず、太占の背、隕石に乗って飛来した
アメーバ状の宇宙生物が恐竜や爬虫類の細胞を取り込み今の姿に変貌した真実は
ソフィアとアノニマの脳内にしかない。所謂ニード・トゥ・ノウの原則に従った
場合、最高総司令部はそれを知るに値しないと前者が判断したためだ。

「奴だ……！」

人間が生きたまま焼かれる光景を見続けているにも関わらず直立不動を崩さぬ
アノニマだったが、大型モニターにレベッカ・ストロングホール드가映り込むと
前のめりに一歩踏み出す。眼鏡の奥にある薄紫の瞳は即、怒色に染まった。

「あら、元氣そうね」

逆に、肘掛けに頬をつくソフィアは嬉しそうな顔だ。彼女は左目という対価を
支払い、更にそのことについて自分を哀れみもしないレベッカを敵でありながら

甚く^{いた}気に入っていた。どうかして自分の陣営に引き込めないか……その考えはサルボガード^{征服}での顔合わせを経て、現在進行形でますます強まっている。

「ソフィア様……！」

「大丈夫よ。これが終わったら私を虐めていいわ。火星に農場、作りましょ？」
アノニマの戒めるような口調に少なからぬ嫉妬が含まれていたのでソフィアが微笑を送ると、発言者は真っ赤になって視線を逸らした。

注1 ナチスに立ち向かう、一人につき一つの様々な特殊能力を持った少女達。



「俺はまだ両足で歩けるぞ！」

第二陣の一員としてマリア・ヴァレリア橋での酸鼻を極める戦いに身を投じた

レベツカは、大声を上げて白らを鼓舞していた。

「首も手も、胴体にまだ付いている！」

勲章を多数身に付け、上質な生地で作られた軍服を纏うドイツ軍人など彼女の周囲には一人もいない。代わりに無数の死体や横転した三号突撃砲が無残な姿を晒していた。加えて不自然に捻じ曲がった鋼鉄や千切れた四肢、風に靡く皮膚の切れ端……全て、ネロハイドラによる大殺戮の結果である。

今日もハンガリーには弱者から獣を引き離す美德は存在しておらず、赤い竜は誰よりも客観的かつ民主的な凶悪さを発揮していた。

「おいお前！ 手伝え！」

レベツカは偶然口に入った仲間を肩を掴むが、振り向いたそいつは左腕がなく、本来それがある筈の場所に骨や血管をだらしなくぶら下げていた。しかも腹部に大きく抉られた傷は腸を吐き出している。

「汝ら……肉体を殺せども、魂を殺せぬ者を恐れるな……されど……肉体と魂を

滅ぼしうる者を恐れよ……」

聖書の一節を呟き始めた兵士から手を放した少尉は頭から砂塵を浴びたせいで血と汗が幾筋もの縦縞を描いている凄まじき形相のまま、ペルヴィツイン錠剤を飲み込んでから足元のパンツァーファウスト^{注1}を掴み、走り出す。

「そろそろ出掛ける時間だ！ 私は死ぬために！ 諸君は生きるために！」

もう空も大地もない。前後左右、見えるのは鉄と炎だけ。それでもレベツカは走った。プラトンの『ソクラテスの弁明』を叫びながら！

へこれ以上の戦闘は無益である！ 生き残る唯一の手段は投降だ！ ファシスト政権のために命を捨てることはない！

対岸にあるスピーカーから自由ドイツ国民委員会の胡乱なプロパガンダ放送が聞こえてきたが、裏切り者の戯言は彼女の心に高オクタンのガソリンを注ぎ込むだけ。

「どちらの籤^{くじ}の方がいいのか、知るのは神の他にいない！」

塩酸メタンフェタミンの力で恐怖心を殺したレベッカは火炎放射を掻い潜ってネロハイドラに迫ると発射。だが成形炸薬弾頭は直撃せず、欄干の間を通過してドナウ川に吸い込まれてしまう。

「畜生！」

マリア・ヴァレリア橋の舗面に突如薄紫に輝く光の穴が現れたのは、発射筒を投げ捨てたレベッカが、鉄と塵が濃密に混ざり合った大気の中を後退せんとした瞬間である。

レベッカの視線の先でワームホールから垂直に飛び出した濃い青と白の魚体は空中で手足をヒレに変化させてから着地するとゆっくり体を起こし、歯の間から唸りを漏らしつつ、特殊な反射膜を有する瞳でネロハイドラを睨み付けた。

サメだ！

来たぞサメが！

サメ人間が現れた！

頭部は後ろに角が二本生えたホホジロザメのそれ。

張り出した先端に口と鼻腔が存在するシュモクザメ頭の右手。

左手はブレード状の長い吻ふんを持ったミツクリザメの頭。

尻尾の先にはヨシキリザメの尖った頭が二つ。

背中から伸びる四本の茶色い触手の先端部は揃って、古代ザメとして知られるラブカのグロテスクな頭部。

立ち向かうな！ この星で、我々は最弱なのだ！

二人怪獣の咆哮で思わず両耳を塞いでしまったレベツカ達は、人がまだ小動物だった頃、猛獣に対して一体何を思っていたのかを悟る。

一方、少しでも離れようと走り出した敗残兵など気にも留めぬネロハイドラはサメ人間に強烈な殺意を向けていた。早速無数の尻尾が突撃するが、タンパク質だけで全てが完結し、骨と肉で成り立っているにも関わらず機械の要素も備えた全長二・五メートルのモンスターは微動だにせずホホジロザメ頭を展開——中の

ウバザメ頭から暗黒怨念寄生虫を放つ。熱線にも見える奔流は、接近する諸々を幾つも薙ぎ払った上で本体の腹まで到達した。

しかし並の生物であれば細胞一つ残さず消滅させてしまう攻撃はネロハイドラ相手では外皮上で火花を散らせるのが限界であり、まだ残る尻尾は構わず殺到し様々な軟骨魚綱・板鰓亜綱なんこつぎょこう ばんさいうあこうが禍々しく合体した姿をしている、有機体なのか機械なのか判然とせぬ境界線上生物の全身に噛み付いた。ざらついた表皮が鋭い歯で貫かれ、瞬く間に緑色の鮮血が溢れ出す。

サメ人間はこの危機的な状況を打破すべくラブカ頭からの火球——凝縮させた暗黒怨念寄生虫を誘導弾宜しく放つ——を自分の頭上で炸裂させ、解き放たれた細やかなエネルギー流を跳躍地雷宜しくネロハイドラの尻尾に浴びせ掛けた。

「ど、どうするんです！」

「逃げるんだよ川広オ！」

降り注ぐエネルギー流は「いい絵が撮れるぞ！」と夢中でカメラを回すあまり

逃げ遅れた日本人特派員達にも遠慮なく襲い掛かり、カメラマンは瞬く間に完全溶解、記者に至っては崩壊した欄干の下敷きにされてしまう。

その有様を相変わらず一瞥もせぬネロハイドラは一旦下がらせた尻尾の先端を全て再生させてから、更なる憎悪を込めて咆哮した。人間とサメの遺伝子比率が三対七のモンスターも負けじと応じる。

二人怪獣の決戦は、ここからが本番だ。

注1 ドイツ製の使い捨て式対戦車無反動砲。

注2 ドイツ人捕虜等によって構成されたソ連の反ナチ組織。



マリア・ヴァレリア橋で展開される怪獣対決はメカソフィアシティだけでなく

げるまんスーパーアリーナにも生中継されていた。

「乾坤やぶ毀るれば、即ちもって易を見ることなし。易見るべからざれば、即ち乾坤あるいは止むに近し」

司令室の椅子に腰掛けてモニター越しの怪獣東成S.O.Sプロレスを楽しんでいるイルザはポップコーンを咀嚼しながら繫辞上传を口走る。乾と坤のどちらかが失われれば易——即ち変化は成立しなくなるという意味だ。

ハンガリーにおける大怪獣総攻撃が終わらない原因の一つは、怪獣東成S.O.Sプロレスをこよなく愛するイルザが容易く行えるにも関わらずソフィア・マリューコヴァの排除を行わない点にある。怪獣一休だけでは良質な人間ドラマしか作れないのと同じで、モンスターメーカーが二人いるからこそ大決戦という構図が成り立つと考えているためだ。

「消滅するのは我らか、それとも奴らか……」

他方、プロトサメ人間は気が気でない様子である。勾注1玉を握る者がサメ人間を



今回バラトン湖から緊急出撃させた理由はアルトウール・シュミット^{プロジェク ト・キーボルカ}の一件やサルボガード^{征服}のような体面作りではない。ネロハイドラを殺さねばならぬという強烈な危機感故であり、彼は鮫林寺がドイツ南方軍集団から独立した指揮系統を有していることに感謝せずにはいらなかった。

「生き残るのは誰ですん？」

「身勝手過ぎます……！」

イルザがそれこそ映画鑑賞宜しく怪獣の一挙手一投足を注視する傍らでプロトサメ人間は唸る。大画面越しに伝わるサメ人間の戦況は芳しくない。たった今もネロハイドラから足を掴まれて欄干に放り投げられ、頭から落下したかと思えば休む間もなく尻尾で引き摺り回されている。

我は暴君なり。

ネロハイドラはそう言わんばかりに、自分の眼前まで無理矢理移動させられたサメ人間を火炙り刑に処してから踏み付け始めた。五月二十六日^{征服}にキーボルカが

見せた、サメ人間の再生速度を上回るペースでダメージを与える新戦術だ。一つ違うのは建造物や車両の残骸を遮蔽物として使っていないことだが、赤き竜にはそんな回りくどい真似をする必要はないらしい。

「やられる！」

それを見たプロトサメ人間は大きく身を乗り出す。現在戦っているサメ人間はサメの遺伝子を組み込んだ受精卵をフランスやオランダから強制連行した女性の子宮へ戻し、胎内である程度成長させてから無理矢理出産させる前にシロワニ注2に倣った共食い合戦を経験、更にはイルザとの精神感応で以前得た再生能力さえも備えているが、おがくずオ混じりのラテックスガをたっぷり塗られたかの如し皮膚が破壊される速度は猛烈だった。

「説明してる暇はないんだ！ 全部送ってくれ！」

突然司令室の電話が鳴ったので応対したプロトサメ人間は、大きく端折られた内容で鼓膜を叩かれる。向こう側にいる人物はレベッカ・ストロングホールドを

名乗り、マリア・ヴァレリア橋から電話していると語った。

「貴方もわからない人だ。あのミサイルは渡すなど命令されています。そもそも、これがイタズラ電話ではないという証拠はどこに？」

「ソフィアの腹ん中からイタズラする度胸はねえよ！」

「すみませんが乗れません」

「おい！」

一体どこから情報を仕入れたのか。急ぎ『怪獣殺害くん』を送ってくれという頼みを受けたプロトサメ人間は論なく拒否するが、レベッカは切られてもすぐに掛け直してきた。

「OKですん！」

イルザに口配せしてサムズアップを返されたプロトサメ人間は無然たる表情を浮かべた後、

「イギリス自由軍団のストロングホール少尉でしたか？ 貴方責任はお取りに

なるんでしょね……？」

根負けしたような様子で、マリア・ヴァレリア橋で頑張る者にそう告げた。

注1 サメ人間の携帯式コントロール装置。日本製。

注2 ネズミザメ口オオワニザメ科に属するサメ。繁殖形態は胎生。



「来た……！」

悪霊のような姿になったレベツカは、死臭立ち込めるマリア・ヴァレリア橋に大使が現れたのを知る。鮫林寺所属の輸送用ヘリが、大型コンテナを吊り下げて近付いていたからだ。

ヘロシア人が捕虜を射殺する噂は人嘘です。私は温かい食事を支給され、快適な

部屋も与えてもらいました」

レベッカと、今や片手で数え切れるまでに焼き減らされた兵士達が響き続ける自由ドイツ国民委員会のプロパガンダ放送で鼓膜を打たれながら大型コンテナに駆け寄る一方——ネロハイドラは勝利を手にしつつあった。無数の尻尾によって全身に大火傷を負ったサメ人間を締め上げているのだ。

「汝の苦難の時は過ぎ去る。あの雲の背後には、汝の幸福の太陽がある！」

トーマス・カーライルを引用しつつランチャーを組み立てるレベッカは、頭に『コルベルク』^{注1}を思い浮かべていた。絶望極まる状況に置かれながらも最後まで諦めず、最後には勝利したヨアヒム・ネットエルベックの姿を。

「安全解除！」

ランチャーの設置が終わると発射ボタンのカバーが開かれ、

「導通旋回！」

次に発射筒の先端がネロハイドラに向けられ、

「準備よし！」

「撃て！」

最後に鯨林寺白慢の対怪獣ミサイルが相次いで放たれた。

白煙を残して近付く誘導弾にサメ人間が気付いた瞬間、ネロハイドラはそれを嘲笑うかのように尻尾を振って無力化する。だが本命は続く第二波であり、その三発はネロハイドラの隙を見事に突く形で着弾、まず一発目は右腕を付け根から引き千切り、残り二発は左肘から先をもぎ取る。

両腕を失ったネロハイドラは怒り狂ってミサイルの発射地点を探そうと躍起になるが、赤い竜はここで、死に掛けのサメ人間を自分の背中側に放り出すという致命的なミスをしてしまう。

気道が確保されて文字通り息を吹き返したサメ人間は休全体を復元させながら立ち上がると、尋常ならざる気配に気付いて振り向いたネロハイドラの前胸部に暗黒怨念寄生虫を叩き込む。放射は第一撃で終わらず二撃三撃と続き、耐え切れ

なくなつた外皮が破れて盛大に出血する。

第四撃で大きくネロハイドラを仰け反らせたサメ人間はミツクリザメ頭による斬撃と突きを立て続けに繰り出し、後者によって相手の体に入った吻ふんをより深く挟り込むべく前進。半開きの口元からどす黒い液体を垂れ流す側はどうかして劣勢を覆そうと回り込む形で尻尾を差し向けるが、シュモクザメ頭で掴み取った攻勢側は思い切り上半身を捻り、それを途中から断裂させてしまう。

ならばとネロハイドラは別の尻尾で、ふと口に入つたソ連軍の燃料トラックを啣えて持ち上げる。空に縦方向の半円を描いた車両はサメ人間の脳天に激突して爆発するが、醜い悪足掻きは状況を打開するには至らない。叩き付けられた者は全身に炎を纏いながら叩き付けた者に突進するとシュモクザメ頭でその後ろ首を掴み連続殴打した。肉がぶつかり合う度に鮮血と湿った肉片がコンクリート面を汚していく。

シュモクザメ頭を放したサメ人間は代わってミツクリザメ頭による縦の一閃を

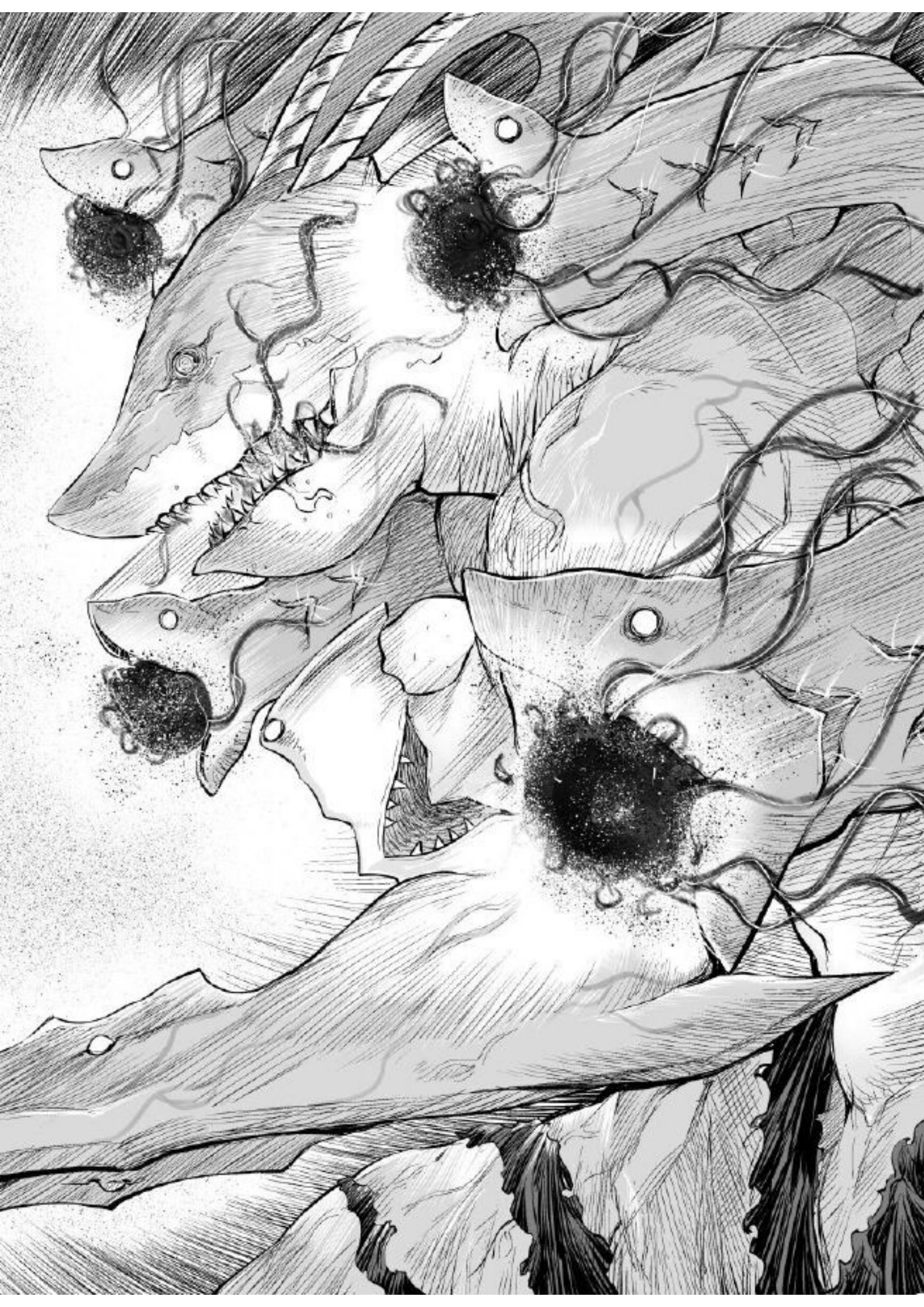
放とうとするが、ネロハイドラの尻尾の横薙ぎを浴びて転倒してしまう。されど即座に立ち上がって体を震わせ、全身の炎を消し飛ばし、煙を流しつつ突き進む。

「ネロハイドラは逃げる気です！」

「逃がすな！ 撃ち殺せ！」

レベツカ達の声に応じるかのように、ドナウ川に視線を向けたネロハイドラを荒々しい前蹴りで転倒させたサメ人間は苦悶の呻きを漏らす相手の頭部を何度も踏み付けると屈み込み、その上顎及び下顎をそれぞれシュモクザメ頭とミツクリザメ頭で無理矢理こじ開けていく。同時並行でホホジロザメ頭の口元やエラから紫色の妖光が漏れ始めた。鍛えようのない体内を暗黒怨念寄生虫で直接攻撃するつもりなのだ。

必死に体を捻って抵抗するネロハイドラは辛くもサメ人間を引き剥がすことに成功するが、ナチス最強の怪獣は使用できる全ラブリカ頭をメカソフィアシテイの新顔に指向済みだった。



終焉の時が来た。

限界まで開いた口元で膨れ上がった火球が放たれるや否や、全てを覆い尽くす大爆発がネロハイドラを包み込む。ドナウ川は激しく波打ち、激震に見舞われたパールカーニとエステルゴムの両市街ではあらかじめ念入りに刻み込まれていたかの如く建造物が一齐崩壊した。

「レベッカさん、これが『死』か——」

虫の息のまま放置されていた負傷兵や彼らを救おうとしていた衛生兵、更には先程サメ人間を援護した兵士までもが強烈な衝撃波に襲われて宙を舞い、空中で全身の肉を骨から引き剥がされた。

凄まじき閃光で染まった世界が再び色を取り戻した時、汚く食い散らかされたケーキのようになっていたマリア・ヴァレリア橋でサメ人間は咆哮する。それは勝利の雄叫びだった。周川には誰もいない。そして、何も残っていない。

この日、ネロハイドラは新しく書き加えられた。バラ人間^{注2}やキーボルカが名を

連ねている、サメ人間の大いなる踏み台となった者達の一覧に。

しかし勝者は気付いていない。

火球が当たる直前、敗者の口から伸びた舌が欄干に絡み付いていたことを……。

注1 一九四五年一月三十日に公開されたナチスのプロパガンダ映画。

注2 かつてメカソフィアシティが保有していた怪獣。



約十分後……マリア・ヴァレリア橋から吹き飛ばされたレベツカは精肉上場の排水路と見紛う程に赤く染まり、数え切れぬ肉片が浮かぶドナウ川からようやくパールカーニの陸地に辿り着いた。

最も、陸も陸で人差ない有様だ。僅かに焼け残ったフアサードのすぐ後ろには

正
面
部
分

家屋の枠組みだけが残り、至る所に五メートル近く伸びた腸や貞つ二つになった胴体、軍用ブーツを履いたままの足が散らばっている。橋上から放り上げられた木に落着いた鉄材や、ほぼ白い灰の山と化した車両も少なからず口に入った。

「今日も俺には何もなし、か……」

この世の現実とは思えぬ光景に佇むレベツカはドナウ川を往く二等辺三角形を見ながら呟く。今回も彼女は怪獣から何も返してもらえなかった。

『事実よりも、自らの信念を態度で示す方が重要である。自分の行動は、未来に反共の模範を示すために必要なのだ』

だが構わない。別に誰かから感謝されたくて共産主義と戦っている訳ではないからだ。腐っていく死体の悪臭が強さを増す死の街の片隅で、レベツカは何度も頷きながら自分の行動理念を反芻した。

レベツカはこれからも戦い続ける。未来に、反共の模範を示すために。

サメ人間の背ビレ

◆一九四六年六月八日

『スターリングラードからベルリンへ』

F a 2 2 3

ロシア語で機体にそう書かれている輸送用ヘリを降りたソフィアとアノニマは今、エステルゴムの市街を進んでいる。グラン橋頭堡は失われたが、消耗著しいドイツ軍は結局この占都への侵入を果たせなかった。

建物の残骸が数キロに渡って連なる廃墟はとても静かだったが、瓦礫の下には数え切れぬ焼死体が葬られもせず残っている。更に、砲爆撃で穿たれた大穴にはどれも澱んだ水が溜まっていた。蚊や蠅が大発生するのも時間の問題だろう。

『ハンガリーの占都、ファシストの巨大な墓場になる』

これまたロシア語で書かれた壁の落書きの下には、鋼鉄と打ち砕かれた人体がごちゃ混ぜになった塊がある。何が起きたのか、一休何人分の人体なのか誰にもわからない。

「一人でよく頑張ったわね！ 偉い！」

先遣隊の案内でとある廃墟に到着したソフィアは、中にいた『我が子』を褒め讃える。彼女の視線の先には、温い風に吹かれた鎧戸の軋む音だけが響く空間で白らの肉体を修復するネロハイドラの姿があった。

『考えるだけで気が狂いそうになることは考えないで済みます』

首に無数の尻尾が直接生えた一時形態の周囲には体液を吸い尽くされた死体が無数に転がっているが、ソフィアの横に控えるアノニマは人間特有の素晴らしい機能を今回も存分に活用していた。

それこそ神話のハイドラのように、ネロハイドラは本体の首さえ残っていれば何度でも再生する。こんな光景はこれから先、何度でも見ることになるのだ。

「さあ、ママ達とおうちに帰りましょう！」

右手に鞭、左手に金属製の手錠を持ったソフィアからそう言われて嬉しそうに頭をくねらせるネロハイドラが長き呟りから目覚めて彼女に従ったのは、母親を

自称する者の強烈な感情に触発されたからだ。

ソフィアも最初は、どうしてネロハイドラが自分に大人しく従ってくれるのか理解できなかった。昨年九月二十二日の鮫林寺で対独協力者を虐殺した後、ここ数年常に燃えていた怒りと絶望は鎮まった筈なのに。

答えは単純だ。

彼女の心にまだ残っている残滓は、それでもなお巨人な感情だったからである。

終

【スタッフ】

キャラクターデザイン／温泉万太郎様・sigma様

クリーチャーデザイン・メカニックデザイン／sigma様

ネロハイドラデザイン／すつとこ様

タイトルロゴデザイン・装丁関連／ナゴ様

とらのあな様特典ポストカード用イラスト／しおこんぶ様

スペシャルアドバイザー／たかなみ様・オガタガクオ様

特別大使／人間食べ食べカエル様

プロモーション協力／共食いゾンビ様・たわけものサポーターズの皆様

推敲協力／れど様・ミクト・アタイ・シヨクシャー・ワキスキー様・正太郎様・M・鈴木様・
ジェントル佐々木様・たわけものサポーターズの皆様

資料協力／下呂子様・けるちゃ様・menatezz様・マリーノシュ様

「ナチス怪獣大決戦 ネロハイドラ襲来 製作費調達クラウドファンディング支援者の皆様」

オガタガクオ様／オカツチ様／かわ様／きしてる様

くずまんじゅう様／コハル様／コブラっち様／しあげかマン様

ジーク様（スタジオエルベ）／すなっち様／タカ・サンダー様

たっぱ様（小狸堂）／たひろ様／ちゅーやん様／とーゆ様

ハロウハロー様／ハンドルネームH様／ブナウン汚蓮寺様

まきしま様／マリナレスカ様／やらか堂本舗様／安西クロ様

芋様／人芝鉄蔵様／缶詰工場様／始条明様／水蓮様／豆腐様

時菜様／南條てつお様／長谷川孝二様／原様／水無月ほたる様

宗像智秋様／倫理観FALLGUY S様／IKE男様

i n a 17様／k u r o a r i 様／C r a s h i n e 様／r y o 様

『ナチス怪獣大決戦 ネロハイドラ襲来』

文:名無しの東北県人

イラスト:Blue_Gk/黒ノ樹/sigama

発行日:2020 年 12 月 5 日

発行:ウツテンカイ(thkjworks@gmail.com)

印刷:株式会社 緑陽社

※本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部/全部を無断で複製・再配布することを禁じます。

※この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、地名等とは一切関係ありません。

※また本作は『サメ人間 0』～『サメ人間 3』までの世界観をベースとした上で一部設定を変更、時系列もリセットの上再スタートした新規シリーズの 1 作目となります。



著名無しの東北県人

表紙イラスト 23

ナチス怪獣大決戦
【超ソフィア】

UTSUTENKAI
presents

怪獣
大決戦

超

ソフィア

SUPER SOFIA

ナチス怪獣大決戦 超ソフィア

文:名無しの東北県人

イラスト:23/sigama/黒ノ樹

ウツテンカイ

**登場人物
&
クリーチャー
&
メカニックス**

ソフィア・マリユ・コヴァー — キャラクターデザイン





レベッカ・ストロングホールド



怒り



笑み



絶望





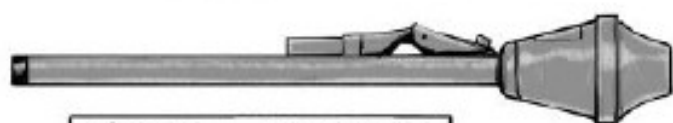
背面タトゥー



エンブレム



全身



パンツァーファウスト



MP40

イルザ・ヴァレンシュタイン — キャラクターデザイン





プロトサメ人間

前



後



ポーズ



顔



サメ人間

前

後



面

開

開



キーボルカ

前部



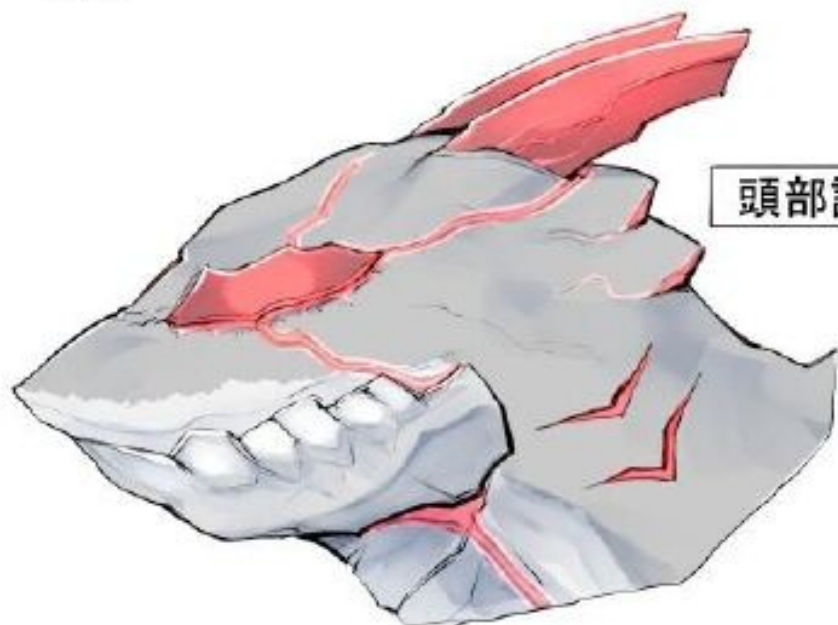
背部

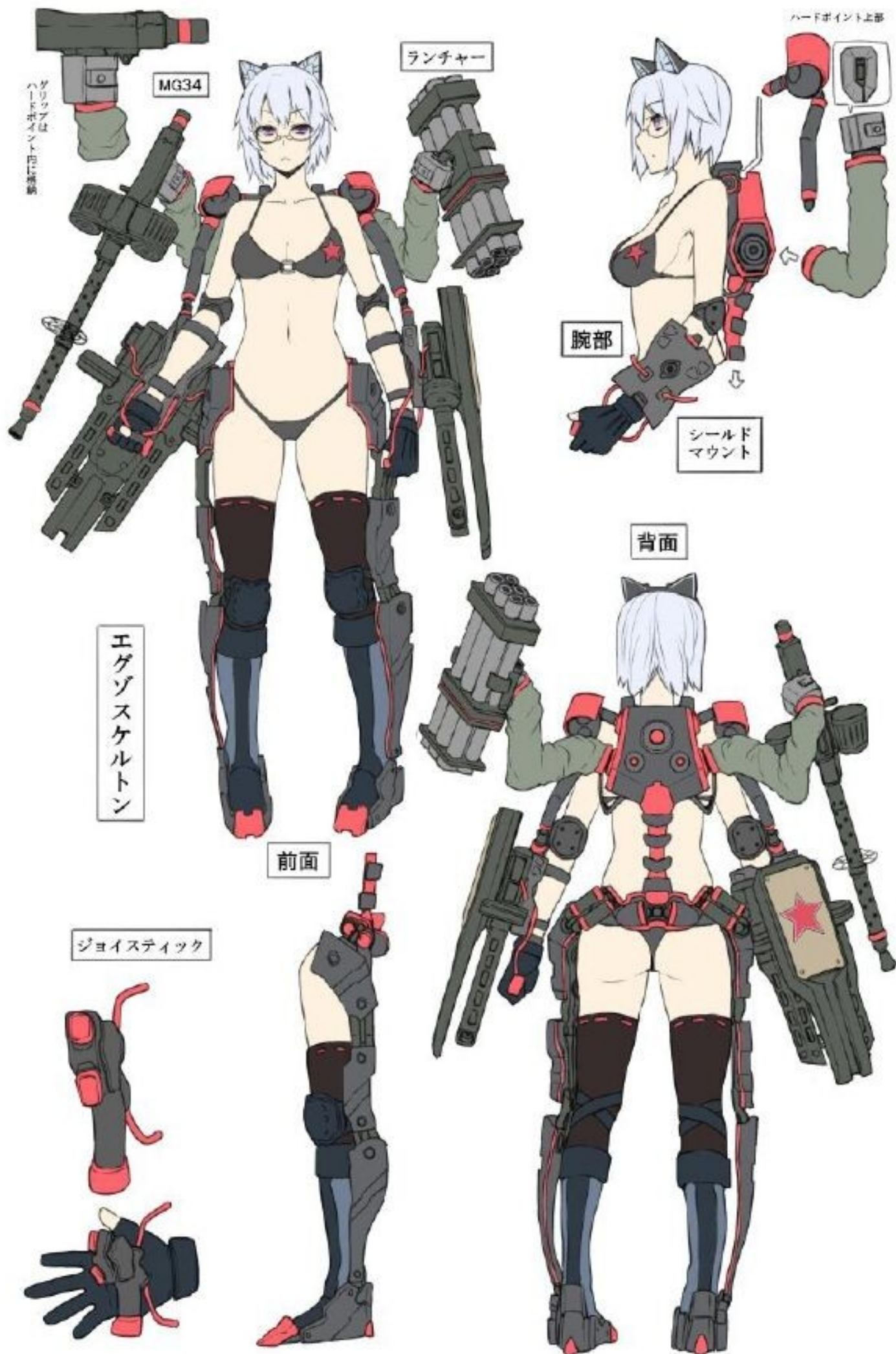


正面



頭部詳細





◆一九四六年六月十五日

「北西部では要衝コマルノを死守し、ウィーンへのソ連軍侵入を防ぐ」

中立国スイス某所に聳える豪邸……JDは小奇麗なその一室で、ハンガリーにおける

ドイツ軍の戦略について女性秘書から説明を受けていた。

「南西部においては、ナジカニジャ及び周辺の油川地帯注1を防衛」

およそ一週間前に行われたグラン橋頭堡注1の戦いはドイツ軍の勝利に終わったが浮き草のような人々が怪獣に殺される世界は変わっていない。とうとう六年目を迎えた怪獣大戦争独ソ戦は一向に幕引きの気配がなく、少なからぬ国土が灰塵に帰したハンガリーでもそれはまた然り。

『ヨーロッパ東部における大いなる戦い』

ヒトラー一派がそう呼ぶハンガリーでの殺戮劇において、六月七日ドイツ軍はエステルゴムに突入できなかったが、それでもパールカーニまでを制圧し敵勢を

グラン川・ドナウ川の東岸に迫り出した。だが十日と経たぬうちに状況は一変し戦力を再編したソ連軍はドイツ語名^{エステルゴム}グランを発起点として反撃、グラン橋頭堡は瞬く間に奪回され、三日大下を終えた国防軍と武装親衛隊^{ワッファ}の兵士達はコマルノに逃げ込む羽目となった。

「村の防衛線はカードの家のようなものです。少しでも綻びが生じたら、全てが一気に崩壊してしまう」

女性秘書は続いて、赤軍の波に呑み込まれた少数のドイツ兵がエステルゴムとコマルノのちょうど中間に位置するカルヴァ村——ケベルクート村同様ウィーン裁定でハンガリーに割譲された、旧南スロバキアの村——に包囲されてしまうも降伏を拒否し戦い続けていることをJDに報告する。

「ドイツ軍の救援部隊は昨日コマルノを発ちましたが、ソ連軍の抵抗に遭い前進できずにいます」

「そうすると、包囲された部隊が孤立して戦った挙句に無残な結末を迎えるのは

「確実だろうね」

いつも通り、JDの顔の上半分は窓から差し込む陽光で見えない。しかし彼の胸中が喜びで満たされていることは、その口元だけで十分に窺えた。

「レベッカには是非、今回も『美しいもの』を見せてもらいたいものだ」

戦いは村の外側で終結しており、包囲網の中で行われるのは掃討戦に過ぎぬとJDも承知している。だが、それは大きな問題ではない。むしろ全てが終わっているという状況は、彼にとって好都合であった。

生まれながらにして莫人なる宮と権力を与えられていたこの資産家は、人間が必死で運命に抗い生きようとする姿を唯一無二の興味としている。故に各国政府関係者との太いコネクションや強大な財力を用いてメカソフィアシティの王ことソフィア・マリューコヴァを支援した過去を持つが、同情心なき残虐非道の敵を屠る中で強大化した彼女の軍勢が、今や何人たりとも叩けぬ領域まで行き着いた現在、また別の人物に関心を寄せていた。

レベッカ・ストロングホールドである。

この者は今、孤立^{ケッセル}地帯と化したカルヴァ村にいた。

注1 エステルゴムからチャタまでの二十五キロに渡って、ソ連軍が西方に三十キロ程突出していた場所。



「少尉！ どうすればいいんですか！ 少尉！」

双肩を揺さぶられて意識を取り戻したレベッカ・ストロングホールドは強烈な頭痛を感じながら、驚く程低く垂れ込めた雲と、焦燥し切った仲間——ドイツ軍兵士——の顔を相次いで視認する。撃破されたサイボーグ怪獣の姿も、そいつの残骸に跨り、人がまだ小動物だった時代を強引に思い出させるかのような咆哮を



響かせるサメ人間の姿もない。

「ああ……そうだったか……」

誰もが自分達を包囲している優勢なソ連軍への絶望的抵抗を試みているここは一九四五年九月二十二日の鮫林寺しやりんじではなく、一九四六年六月十五日のカルヴァ村なのだ。怪獣達の雄姿は、レベツカが気絶している間に見たフラッシュバックに過ぎなかった。

「そろそろ出掛ける時間だ。私は死ぬために。諸君は生きるために」

ゆっくりと起き上がったレベツカは、煤と泥だらけの酷い有様で決まり文句を口走る。プラトンの『ソクラテスの弁明』を。

「どちらの籤くじの方がいいのか、知るのは神の他にいない」

シオーフォクへの撤退やアルトゥール・シュミット号の惨劇、更にはドラウフゲンガー作戦の中で敵地単独潜入の特例的許可及び対怪獣戦のオブザーバーなる役割を与えられていた彼女は今、グラン橋頭堡での後退戦闘の末、カルヴァ村の

戦いを指揮しているのだった。正確には混乱の中で『指揮せざるを得なくなり』、南方軍集団司令部からの死守命令という組織的集団自殺命令以外の何物でもない良識と人道への狂気じみた反発に加担している。

『事実よりも、自らの信念を態度で示す方が重要である。自分の行動は、未来に反共の模範を示すために必要なのだ』

村の中心まで一時後退しろと全力で叫んだレベッカは、ロンドンで何の目的もなく生活していた頃、モスクワ前面におけるドイツ軍の敗北を知るや否や「共産主義から欧州を守ることが自分の使命なのだ」と確信し渡独、イギリス自由軍団^{注1}に身を投じた過去を持つ。

もしかすると、闘争の大義は最早失われているのかもしれない……。

仲間達と共に疾走するレベッカの冷静な部分は確かにそう認識していた。だが彼女のそれはもう僅かしか残っていない。キーボルカやネロハイドラ^{注2}との凄惨な戦いは共産主義への本能的な憎悪と相まって、このSS少尉を反ロシアの狂信的

抵抗者に変貌させていたのだ。

注1 武装親衛隊のイギリス人部隊。

注2 メカソフィアシティが保有するサイボーグ怪獣。三ノ機まで存在する。

注3 メカソフィアシティが保有するドラゴン怪獣。

◆一九四六年六月十六日

「はあんっ……」

一糸纏わぬ姿のイルザ・ヴァレンシュタインは、仰向けに横たわるプロトサメ人間の剛直——その裏筋を下から上にかけて一舐めした。

「——っ」

最も敏感な場所に舌の感触が走った刹那、熱い吐息も迫い打ちで浴びせられたプロトサメ人間は思わずベッドの上で逞しい魚体を微震させてしまう。

「あんっ……」

イルザは四つん這い状態のまま再度舌先で裏筋を舐めた後、次は亀頭を愛撫し始める。彼女は先端技術研究部隊を率いて非道極まる人体実験を繰り返し、サメ人間等、様々な軍用生物や改造人間を頼まれてもいないのに世に送り出してきたマッドサイエンティストだ。更にはバラトン湖西岸に居を構える鮫林寺を率いて

ハンガリー西部のソ連軍を押さえ込んでもいた。

「もっとしてあげますん……っ」

黒光りする亀頭は瞬く間に唾液にまみれて鈍い光を反射させるようになったがイルザは責めを止めない。鈴口を穿るように舌尖を動かしたかと思えば一旦口を離し、今度は左右の鼠蹊部に沿って舌を走らせる。肌よりも少しだけ濃い汗味が彼女の口内に広がった。

「——あっ」

やがてイルザは根元にそっと右手を添えた上で、プロトサメ人間のそそり立つ剛直を丸々啜え込む。そして、限界まで頬を窄めて頭部を前後させた。げるまんスーパードリーナの一室に響き渡る、淫らな水音——加えて止め処なく喉奥から漏れ出す、声にならぬ響き。

「んうっ……」

イルザは再び口を離すと、快感に打ち震えるプロトサメ人間を挑発するような

上口遣いで視認しつつ傘の部分に舌を這わせていく。裏側に少しだけ残っていた恥垢が熱い唾液に押し流され、そのまま喉を通して自分の体内に入ってくるのが彼女は嬉しくてたまらなかった。

まだ終わらない。まだまだ終わらない。

未だ完全に濡れ切っていない陰嚢を舌で愛撫した後、イルザは問髪入れず蟻の門渡りを一撫で、やがて窄まりに辿り着く。

「イルザ……ッ！　そこは汚……」

制止もむなしく不浄の穴に舌が触れた瞬間プロトサメ人間は呻くが、イルザは構うことなく皺の一つ一つを舐め、頃合を見計らって中に押し入った。

「イルツ——」

プロトサメ人間は背い体を弓なりにするが、イルザは口全体に広がった苦味を楽しみながら、鼻声を鳴らしつつ菊門の中で縦横無尽に舌を乱舞させる。激しい愛撫によって、腸壁という腸壁が徹底的な唾液のコーティングを受けた。



「イルザ様……ッ！」

上官に下の口を舐められるという恥辱に耐え切れなくなったプロトサメ人間は無理矢理起き上がってイルザをベッドに押し倒すが、入れ違いになる要領で下になった側は嬉しそうに微笑むと左手中指に唾液をたっぷり塗す。そして掌を上に向け、それでも切なげな収縮を繰り返しているプロトサメ人間の窄まりに先端を突き入れた。

「——ッ！」

濡れに濡れた穴が抵抗なく異物を受け入れるや否や、イルザは柔らかな腸壁に包み込まれた中指を激しく動かし、同時に右手で剛直を扱き始めた。我慢させるつもりなど毛頭ない、射精させるという一点のみを求めた、強烈なストローク。プロトサメ人間は一分と経たず限界に達し——最終的な決め手は、前立腺への一押しだった——剛直から悶々泉宜しく白濁をぶちまけた。一瞬にして、室内に立ち込めるものは栗の花臭さだけに変わる。

「……かった……凄かったです、イルザ様……」

「うふふん、嬉しいですね」

荒い呼吸で腹を上下させるプロトサメ人間の前で、イルザは豊か過ぎる胸元を汚した白濁を恍惚の表情で舐め取った。

「イルザ様、今度は私に責めさせてください」

切な訴えを耳にしたイルザは、たった今熱い精を放ったばかりの一物が早くもはち切れんばかりに屹立していることに気付く。今やすっかり見慣れた光景ではあるが、やはり恐るべき回復能力だ。

当然イルザは「喜んでん……っ」と頷き、彼の願いを快く受け入れた。



「モスクワ育ちはいつだってモスクワの話をする……」

メカソフィアシティ^{注1}の輸送用^{F a 2 2 3}ヘリを降りた女は、立ってられない程弱っているにも関わらず、指導的ドイツ共産主義者の長広舌を聞かせられている捕虜の集団を見ながら呟いた。

「だけど貴方達もそんなこと、今まで考えもしなかったでしょう？」

集団の中から「戦争なんてもう嫌だ。ヒトラーなんか死んでしまえ！」と叫ぶ跳ねっ返りの捕虜に冷ややかな視線を浴びせながら歩き始めたこのスペクターは^{注2}ソフィアだったが、同時に彼女ではなかった。瞳は確かに赤^{注3}だったし、艶やかな黒髪も揺らしている。しかし肢体は筋肉質で、アノニマと同じマイクロビキニ姿。

このソフィア——『超ソフィア』は、数年前大怪我を負ったキーボルク大隊のスペクターが顔を変え、強烈な自己暗示によって私はソフィア・マリユーコヴァなのだと思い込んだ影武者である。欧州各地で語り継がれるソフィアの恐るべき所業の数々は、実はオリジナルと彼女の二人が行った諸々が一人分に合わさった形で認知されているのだ。

「お待ちしております」

超ソフィアがカルヴァ村の近郊に建てられた野戦司令部に到着すると、衛兵はまるでロシア皇帝を迎えるかのように胸を張って直立不動。非常に屈折した論理ではあるが、ソフィアを唯一絶対的な存在として認知しているキーボルク大隊の構成員は『ソフィアが信じているから』という理由で超ソフィアをソフィアだと信じていた。

「SSと奴らのティーガーが頑張っているので、これ以上速くは前進できません。最後の胡桃は今までになく硬いようです」

「ライオンと四つに組み合っている訳ね」

内部で現地責任者から状況説明を受けた時、超ソフィアはカルヴァ村で頑張るドイツ軍が烏合の衆とは到底言えないことに気付いた。村の中心部まで後退した敵はケーニヒスティーガー重戦車と共に、恐るべき戦いぶりで圧倒的なこちらを何度も撃退しているという。

「じゃあ、やることは一つね。ライオンを手懐ければいいのよ」

超ソフィアが導き出した答えは至極簡単だった。そもそも彼女は、そのためにカルヴァア村にやってきたのだ。

レベツカ・ストロングホールドというライオンを手懐けるために。

注1 バラトン湖から南東三十六キロ、ザルビッツ運河とシオ運河の合流地点に存在するソ連軍の決戦機動要塞都市。同軍最強のキーボルク大隊の拠点でもある。

注2 ナチスに立ち向かう、一人につき一つの様々な特殊能力を持った少女達。

注3 メカソフィアシティ所属のスペクター。



「俺とソフィアをここまで関わらせるなんて、どうして神様は俺にそこまで腹を

立てたんだろうな」

辛うじて……ではあるが、一体何度日かわからぬキーボルク大隊の米襲を撃退したレベツカの表情は暗い。

「俺はそこまで見下げ果てた存在か？　こんな罰に値する存在なのか？」

急ごしらえされたカルヴァ村の防御陣地にいるレベツカの手には、キーボルク大隊が空から撒いたビラが握られている。その紙面に自分の顔写真付きで「君もキーボルク大隊の一員にならないか？」というソフィア・マリューコヴァの直筆勧誘文が書かれていたことが彼女の胸中に濃い影を落としていた。

「本当にもう、勘弁してくれ……」

今年五月にサルボガードで直接会って以来、ソフィアは事あるごとに一方的なアプローチを仕掛けてきた。レベツカはソフィアを凄まじく嫌っているが、逆に後者は前者が好きで好きで仕方ないようだ。憎むのも憎まれるのも慣れっこだが、憎んでいるのに好意を寄せられるのは正直たまらない。

「くそっ……」

レベツカは突如、激しい頭痛に襲われてその場に座り込む。頭が内側から爆裂してしまっているのではないかと本気で思える程の痛みだ。

「これじゃ呪いだろうよ……あの祟り神め……！」

ここ最近、何かしらソフィアに関わることが起きると耐えられぬ程に頭が痛むようになった。時には昨日のように昔見た光景が蘇りもする。実際に悪さをしてるのは自分の脳内に摘出されないまま残っている砲弾の破片だろうが、それは理由であり、原因はやはりメカソフィアシティの王としか思えなかった。

「俺は鳥籠の中にいるんだ……ロシア兵に囲まれた籠の中にな……」

三分経って痛みが和らぎ始めると、レベツカは震え声を発しつつ立ち上がって司令部に向かう。どうせ待ち受けているのは不快極まる諸々だろうが、それでもソフィアについて考えるよりはマシだと彼女は考えていた。

そして昨年九月のシオーフォク同様、レベツカは道中で色々なものを見た。

「戦闘は終わったも同然なんだぞ！」

酷い怪我を負って泣き叫ぶ仲間を介錯していた兵士は自分の頭を叩いて『気は確かか？』と身振りで問い掛けてきた。そんな男の姿はまるで石器時代の洞窟に潜む未開人で、顔は青白く頬も落ち窪み、髭も伸びっ放し。

「切り落とせ！」

少し進むとゴムエプロンをした軍医二人が、衛生兵に押さえ込まれた負傷兵の手足を切断する光景。上腕部及び膝とさようなを交わした肉塊が、すぐ足元のバケツに投げ込まれている。

「一か八かの総攻撃を仕掛けて、敵をグラン川東岸まで後退させるべきです」
「やっぱりかよ……」

カルヴァ村の司令部こと広場に面した教会に到着したレベツカは、玄関の上のバルコニーに取り付けられた竿に下がる鉤十字の旗だけが白軍占領を示す最後のシンボルと成り果てた建物内で、包囲下にある仲間が案の定事態を全く把握して

いないことを知る。

「なら降下猟兵^{注1}を使って反撃するのは如何でしょうか？ ロシア兵全員を地獄に送れるかもしれません」

これもまた、想像力の恐るべき欠如であった——カルヴァ村にいる降下猟兵は如何にもそれらしく専用のヘルメットを被っているが、正体は未経験の地上戦に転用された空軍の地上要員に過ぎない。要するに、全面攻撃を受ければ真っ先に壊滅するような連中なのだ。

「十字架とアイアンクロス^{鉄十字}のどっちかを選ぶ必要があるな……」

レベッカは思わず卒倒しそうになりながらも、死後に与えられる墓標ではなく生きて勝ち取る武勲の証を求めることに決めた。

そう思うしか、現状もう選択肢はなさそうだった。

注1 ドイツ軍における空士挺部隊の呼び名。

◆一九四六年六月十七日

「はあっ……プロトおっ……」

陰惨で余所余所しい悪党鮫林寺の都では、今日も『鮫とは交尾する魚である』という漢民族の優れた感性が具現化していた。

「見てんっ……」

げるまんスーパーアリーナの一室で裸体を晒しているプロトサメ人間の前には、いつになく真剣な顔をしたイルザがいる。彼女もまた、生まれたままの姿。

「んっ……」

頬を染め、荒い息を鳴らすイルザが下腹部に力を入めると、人差し指と中指で広げられた秘部——蜜とローションでこれでもかと湿っている——から茹で卵が排出された。

「——うっ」

問を置かず、事前に胎内に入れておいた茹で卵が、それこそウミガメのように口尻に涙を溜めた女性将校からもう一つ押し出されて床に落ちる。

これは産卵の代償行為だ。

プロトサメ人間からどれだけ多くの熱情を子宮に注ぎ込まれても染色体構造の関係で着床には至らない。つまりイルザは愛しい相手との間に子を成せぬということだ。この行動は、そんな事実への二人の抵抗でもあった。

「座ってん……」

全ての茹で卵を出し終えたイルザはプロトサメ人間の手を取ってベッドの縁に導くと、屹立した剛直を豊かな双乳で挟み扱き始める。上から下へ、下から上へ。水気をたっぷり含んだ摩擦音が響き、室内の湿っぽい空気を揺らす。

「んっ……」

カウパー

イルザは汗と先走りの混合液で濡れた一物への包み込みはそのままに顔を上げ、プロトサメ人間と口付けを交わした。



「っあっ……うっ……」

ライトアップされて室内に立ち並ぶ大型カプセル内にはどういう訳か上半身がウバザメの頭部に変わっている老婆や、頭がなく首筋と右肘にサメの頭が付いている成人男性、果ては人魚のように下半身がサメになっている、両腕部がヒレの赤ん坊……イルザの作りし実験体が液浸標本となって浮かんでいるが、創造主は気にも留めずプロトサメ人間と激しく舌を絡ませ合う。頬を染めて、甘い音色を漏らしながら……。

「あっ……イルザっ……！」

名残惜しくも顔を離れたイルザがより強い圧力を加えた上で豊満による奉仕を再開するなりプロトサメ人間の両足は震え出し、喉奥からも切なさが増え始める。

「——ッ」

そして数秒後、尿道を駆け上った熱が解き放たれた。それは「きゅんっ！」と思わず声を上げたイルザの美貌にも降り掛かり、鼻先や頬だけでなく前髪までも

汚してしまう。当然、一物を包み込んでいた豊満は白く染め抜かれた。

「も、申し訳ありません！」

プロトサメ人間は慌てて手を伸ばし、せめて前髪の汚れだけでも取り除こうとしたが、イルザはそれを掴むと人差し指と中指を頬張った。続いて、口内で汗と唾液を攪拌。溢れた滴が自分の顎先を伝って、床に落ちても構わなかった。

そして次の瞬間イルザは飛び掛かるようにしてプロトサメ人間をベッドに押し倒し、自分の両足を大きく広げ、一度射精してもなお屹立を維持しているプロトサメ人間の一物を秘部に受け入れる。初めての交わりで彼の童貞を奪った瞬間と同じように。

「——あっ！」

根元まで入り切るや否や、仰け反ったイルザの背中に凄まじき快感が走った。拙挿が、始まる。

数え切れぬ情交でプロトサメ人間の一物に完全最適化されているイルザの膣は

今日も彼自身を満遍なく受け入れ、腰が強く打ち付けられる度、波打つ褐色から熱い滴が撒き散らされた。

「イルザ……ッ！ 凄……っ！」

両手でイルザの腰を掴んでいたプロトサメ人間は、すぐに彼女の腹から首筋にかけて両掌を走らせる。肌により一層白濁が塗り込まれ、弾んだ乳房がすぐさま元の位置に戻った。

「い……っ……プロトお……っ……い……っ……っ！」

腰の律動による淫らな水音で鼓膜を叩かれながら、もっと強く、もっと確かに胸を愛してほしい欲求故、イルザは自分の双乳を鷲掴みにした。プロトサメ人間の両手を、更にその上から掌で覆う。

「イルザ……っ！」

やがてプロトサメ人間は上体を起こす。対面座位に移行するために。

「はあ……っ……好き……っ……っ！」

より深い場所を突かれながら、イルザは逞しい広背筋に手を伸ばし、すっかり濡れた相手の耳元で愛を囁く。上半身全体が押し当てられた胸板では圧迫された豊満が撓んで外側にはみ出し、陰毛同士が絡み合う秘部は先程よりも大きな音を響かせている。

それから、どれ位の時間が過ぎただろうか？

射精と絶頂を何十回と繰り返した二人は繋がったまま舌を絡ませ合い、白らの唾液を相手の喉奥に少しでも多く送り込もうとした。そして先を争うかのように鼻先や顎にも舌を這い回らせた挙句、肉体の輪郭を忘却。更には、お互いの肌の境界線がどこにあるのかさえも失念するに至った。



「ソフィア様は自分が納得するまでとことんやるお方だ。嫌なら嫌と直接言った

方がいいぞ」

捕虜となったキーボルク大隊の兵士は、レベツカが部屋に入ってくるなりそう言い放った。

「お断りだ。あんな奴と同じ空気なんか吸ったら、肺が腐ってなくなる……！」
カルヴァ村の司令部に程近い場所に建つ家にやってきたレベツカは、とつくの背に住人がいなくなった空間で吐き捨てる。

「例えあの女が世界を救おうと、例えあの女がこれから先どれだけの善行を重ねても、俺の奴に対する考えは変わらない。誰よりも赤いクソ野郎ってことはな」
「ならば永遠に口を付けられるだろうな！ 農民に化けて逃げれば良かったんだ。大変なことになるぞ」

捕えられた後にドイツ兵から激しい暴行を受けたのか、全身を乾いた血と泥で汚している捕虜はそれを聞いて失笑し何度も口を横に振った。

「確かに俺はアカ共を大勢殺したが、イギリス人には一発も撃っちゃいない！」

大変なことになるぞという言葉に酷く動揺したレベツカは、この場においては少し不適當な返しを行ってしまう。

「俺は後ろめたいことなんて何一つしちやいないんだ。だから、変装して逃げる必要なんざどこにもない」

しかしSS士官学校で軍服に袖を通す前から、ナチの手先になることを彼女が特段大きな問題だと思っていなかったのは事実だった。何故なら、イギリス人がソ連と戦うことのできる組織は地球上にドイツ軍しか存在しなかったからだ。

「お前はいつか後悔する」

「もしも勝敗が逆だった時に『後悔している』と俺が言ってもお前は信用しないだろうよ。ここで悔いていると抜かしたら、俺は嘔吐きか腰抜けってことだ」

銃撃の如し早口で捲し立てたレベツカは一方で、ソフィアと関わってしまったことを深く後悔していた。可能なら今年の五月に戻って、過去の自分に「馬鹿な真似はやめろ！」と言ってやりたかった。

だが、それはもう叶わない。現実を生きていくしかないのだ。
だからレベツカはMP40短機関銃を構えると、現実を生きていくために捕虜を
蜂の巣に変えた。



数時間後――。

「イワンだ！ イワンが来るぞ！」

キーボルカの放ったミサイルがカルヴァ村に降り注ぐのと、最前線から慌てて
逃げ帰ってきたドイツ兵が同地の塹壕に飛び込むのは同時だった。村の至る所で
凄まじい爆発が起き、土の塊と混ざり合った人体が空高く舞い上がる。

「撃て！ 撃ちまくれ！」

だがレベツカは捕虜収容所に赴くための支度を始めるつもりも、軍医に「自殺

用の薬をくれ」と懇願するつもりもなかった。狭い地域に圧迫された彼女らにはコマルノからの救援以外何の希望もなかったが、それでも降伏という選択だけは存在していない。

「敵戦車は十六、十七、いや二十……！」

「数えんな！ 撃ちまくれ！」

あちこちに旗を掲げている大群に対し、手持ちの装備と弾薬だけで戦わざるを得ないドイツ兵はレベツカ指揮の下、今回も絶望的抵抗を試みる。共食い整備でなんとか動くようになった火器人間は三連装ガトリング砲を猛連射、ケーニヒスティーガー重戦車——フェルトヘルンハレ重戦車大隊の最後の二両も押し寄せるT-34中戦車に死の大槌を放ち、共に防波堤として突破阻止を図った。一ミリの慈悲をも差し挟むことができない戦車戦の一方、歩兵もパンツァーシュレックの発射筒が灼熱して持てなくなる程の連続発射を敢行する。

「鮫林寺からの連絡、ありません！」

「畜生！」

この危機的な状況を一気に打破できるのは鮫林寺のサメ人間位だが、一昨日と昨日、二度に渡って行われた支援要請への返信はない。

レベッカは過去二度も共闘した怪獣の到来を心から待ち侘びたが、綿で作ったような雲を突き破って実際に空から現れたのはサメ人間ではなく、メカソフィアシティがかつて撃破したその別個体を回収後再生した生体ロボットだった。

両腕にジェットハンマーとチェインソーをそれぞれ装備しているキーボル力は着地するなり、ナノメタルの鮮明な赤が走る体から再びミサイルを放つ。着弾の瞬間、地中に爆薬が仕掛けられていたかのように土砂が跳ね上がった。否応なくそれに巻き込まれて吹き飛ぶドイツ兵の姿は、人型に丸めたアルミホイルを黒く塗ったものにしか見えない。

「……あつ」

死体だらけの防御陣地からこれを見ていたレベッカの脳裏に忌まわしき光景が



フラッシュバックした瞬間、彼女はまたも強烈なる頭痛を感じてしゃがみ込んでしまう。頭の中を支配するのは眼前の地獄絵図と大差ない、昨年九月二十二日の鯨林寺での出来事だった。あの時キーボルカは、今回と全く同じやり方で人間をゴミのように消し飛ばしたのだ。

「畜生！ 畜生！ 畜生！」

半ば悲鳴めいた金切り声を発しながら、レベツカは胸ポケットから取り出したペルヴィツィン錠剤を飲める限り口に押し込む。これは疲労をポンと吹き飛ばす覚醒剤であって頭痛薬ではない。

だが飲まないと、とても止気ではいられなかった。

この後レベツカ達はそれでも十数両のT・34中戦車やSU・85自走砲を鉄屑に変えたが、代償として七割以上が他人の助けがなくてはならないような重傷を負う羽目になった。状況的には考え得る最悪を極めている……キーボルカ大隊は人員と物資を事実上無限に補充できるが、カルヴァ村のドイツ軍部隊には

何の手立てもないのだから。

注1 ドイツ製の対戦車ロケット擲弾発射機。



「当然の報いだ。スターリングラードの殺物サイロを燃やした罰だ」

「駄目よ、そういうこと言っちゃ」

メカソフィアシティの地下司令部でカルヴァア村の攻防戦をモニター越しに注視していた『オリジナルの』ソフィア・マリューコヴァは、右横で座づいた副官を嗜める。

「ソフィア様はどうして、あの女にここまで甘いのですか！」

左胸に赤い星を描いた黒のマイクロビキニを纏う、銀髪と端正な顔の持ち主は

直後怒鳴る。先程の発言は対象を広くして曖昧にしていたが、やはりソフィアがレベッカ・ストロングホールドとの関わり作りに注力——正確には、レベッカに一方的な好意を寄せ続けている現状への不満の吐露が目的だった。

「だって彼女は優秀でしょう？ ああいう子は一人でも多くほしいのよ」

驚くべきことに、今回のグラン橋頭堡奪還作戦はレベッカを仲間に引き入れるためだけに行われたものだ。軍事組織の私的利用も甚だしいが、兵と装備を全て自前で調達するメカソフィアシティは責任の対価としての自由を最高総司令部に認められた独立勢力なのである。

「私よりも優秀ですか？」

猫耳めいた銀色の飾りを頭部に付けている、引き締まった肉体のスペクターは大きく声のトーンを落としてソフィアを見つめる。

「あの女は……私よりも優秀ですか？」

アノニマはエグゾスケルトンを纏い、全ての敵からソフィアを守り続けてきた

存在だ。そんな彼女にしてみれば、敬愛する最高司令官が別の女にご執心なのは到底耐えられないのだろう。

『考えるだけで気が狂いそうになることは考えないで済みます』

加えてアノニマはいつも人間特有の素晴らしい機能を存分に活用してきたが、今回ばかりはもう考えずにはいらなかったようだ。

「そっか……そうだよね」

アノニマが珍しく薄紫の瞳に涙を浮かべているのを見たソフィアは、これ以上レベッカについてあれこれ動くのはやめようと決断する。こちらがどれだけ良くしても、向こうに一切の意思がなければどうしようもないのだ。

「ごめんね」

アノニマの肩をそっと掴んだソフィアは『装具帯の恋』で結ばれている相手と口付けを交わしてから、彼女の口尻に溜まった涙を人差し指で拭いた。

「私はレベッカのことを忘れるわ」

アノニマの耳元でそう囁いたソフィアは優しい笑みを浮かべていたが、同時に胸中では正反對のことを考えていた。今後レベツカは死ぬか、死よりも恐ろしい苦しみを味わいながら生き続けるかの二択だ——と。

理由は単純である。

人の心を奪っただけでなく、多くの時間及び労力を山分に割かせておきながら向き合おうとさえしなかった輩は、絶対にそうなるべきだと考えているからだ。



「あっ！」

シャワーと着替えを済ませて通常業務に戻ったプロトサメ人間は、端末の前で素っ頓狂な声を上げていた。情父の未眠っている間に、カルヴァ村から幾度にも渡る支援要請が入っているではないか。

「おおん？」

額に脂汗を滲ませたプロトサメ人間は波風を立てぬよう黙殺しようと考えたが、いつの間にかやら背後に現れていたイルザは彼の肩越しに端末を覗き込んだ。

ああ、面倒臭いことになった……。

プロトサメ人間の血圧が猛烈な勢いで上がっていることに気付きもせぬ人物は白室の金庫に駆け寄り、中から勾玉を取り出していた。これはサメ人間の携帯式コントロール装置だ。指で擦るだけで、ナチス最強の怪獣は居城のバートン湖を離れてお望みの場所に向かってくれる。

「しかしカルヴァア村にいるのは、ネロハイドラではなくキーボルカです」

イルザは怪獣^東プロレスをこよなく愛し、全てにおいて優先する。ハンガリーにおける殺戮劇が終わらぬ原因の一つは、怪獣一休だけでは良質な人間ドラマしか作れないのと同じで、モンスターメーカーが二人いるからこそ怪獣大戦争という構図が成り立つと彼女が考えているため。

「もう食傷気味ではありませんか？」

プロトサメ人間はその点を踏まえてイルザを止めようとする。何せサメ人間とキーボルカはこれまでに四回も戦っているのだ。

「むーん……」

しかし、褐色肌の親衛隊将校は不満げに頬を膨らませる。

「私が可愛くないんですん？」

「可愛いです。でも、可愛いからって許されません」

奇しくもメカソフィアシティと同じように、鮫林寺は南方軍集団から独立した指揮系統を有している。だがプロトサメ人間はそれを完全なる自由だとは考えておらず、大組織の一員として他にない働きを見せるからこそ与えられる対価だと認識していた。確かに上官のことは愛しいしその願いもできる限り叶えたいとは思うが、それはそれ、これはこれと考えなければならぬ時はやはり存在する。

今はその時なのだ。イルザを守るためには、時としてイルザの願いを否定する

ことも必要なのである。

「どうしても……駄目ですん？」

「駄目かもしれません」

が、プロトサメ人間は悲しげなイルザの視線を浴びて早々に揺らぎ始める。

「わかりました。でも少しだけですよ！ サメ人間が少しでも負傷したら、その時点ですぐに撤退させますからね！」

彼が自分の意思を固持できたのは僅か三十秒であった。



強化外骨格
エグゾスケルトンを身に纏った超ソフィアがカルヴァア村の戦いに介入したのは数の暴力に押し切られたケーニヒスティーガー重戦車が二両とも撃破された頃である。

「エグゾを着てる奴がいる！」

「なんだと！ そいつの髪は銀色か？」

ホバー移動で突進しつつバックユニット右側に装備されている七十五連サドルマガジン付きMG34軽機関銃を連射する超ソフィアは混線する無線に「黒よ」と返して左ジョイスティックを操作、一方こちらはバックユニット左側に取り付けられた六連装ランチャーからロケット弾を発射し、水平射撃を行わんとしていた八十八ミリ高射砲を葬る。

「アノニマみたいに喋らないわよ」

巻き込みを防ぐためシニヨンに髪型を変えている超ソフィアは続いて、右手のPPSh-41短機関銃を連射しつつ大地にS字を描き、死の物狂いで撃ちまくるドイツ兵らの後方に出ると百八十度旋回。問髪入れず右ジョイスティックの上部ボタンを押して今度はMG34軽機関銃を掃射し、まだ完全には向き直っていない彼らを撃ち倒した。

ちょうどその時——超低空で攻撃を行おうとした飛行形態のキーボルカが突如地面を突き破ったミツクリザメの吻ふんに阻まれて墜落した。

サメだ！

来たぞサメが！

サメが来たのだ！

直後サイボーグ怪獣がすぐさま立ち上がりとうとする眼前で地面が割れ、まるで豪雨に晒されたかのように土を振り撒きながらサメ人間が現れる。

頭部は後ろに角が二本生えたホホジロザメのそれ。

張り出した先端に口と鼻腔が存在するシュモクザメ頭の右手。

左手はブレード状の長い吻ふんを持ったミツクリザメの頭。

尻尾の先にはヨシキリザメの尖った頭が二つ。

背中から伸びる四本の茶色い触手の先端部は揃って、古代ザメとして知られるラブカのグロテスクな頭部。

何種類もの軟骨魚綱・板鰓亜綱なんこつぎょう ばんさいあこうが組み合わせたこの怪物はキーボルク大隊に数え切れぬ苦渋を舐めさせてきた。ある時はメカソフィアシティ、またある時はアルトゥール・シュミット号、更にある時はサルボガードと枚挙に暇がない。

「来たわね。三号機キーボルクは下がって」

しかしキーボルクを撤退させた超ソフィアは恐れることなく向かっていく。

タンパク質だけで全てが完結し、肉と骨で成り立っているにも関わらず機械の要素も併せ持つサメ人間は暗黒怨念寄生虫を放つが、超ソフィアは焦らず平円を描いて回避——そのまま横を向いているサメ人間との距離を詰め、口線は相手を捉えたまま右足で左脰脛を蹴り飛ばした。そして、ラブ力頭が殺到してくる前に急速後退。

問を置かず、MG 34軽機関銃で弾幕を展開しながら急接近して二発口の蹴りを先程と同じ場所に叩き込んだ超ソフィアは、昨年八月十一日のアノニマのように全武装を切り離しての明口なき殴り合いを挑むつもりは毛頭なかった。

足首を曲げたまま固定して、相手の脛脛に巻き付けるかの如し蹴りの三発目が入るとサメ人間はバランスを崩し、危うく前のめりに転倒しそうになった。次の四発目は命中せず超ソフィアは勢い余って横一回転してしまうが、左足の機能を早くも失いつつある獣は鋭い踏み込みを行えず、難なくシールドの先端に押され距離を作られてしまう。

サメ人間は確かにナチス最強の怪獣だ。しかしそのベースがあくまでも人間である以上、人間同様、カーフ^{服部}周辺の筋肉は鍛えようがなかった。加えて暗黒怨念寄生虫や火球攻撃を放つべく高確率で足を前に出していることや、それに体重を乗せているためダメージを逃せないという事情も重なっている。

『接近戦を避け、再生速度を上回るペースでダメージを与える』

超ソフィアはキーボルク大隊の対サメ人間ドクトリンとこれらの諸々を、今回見事に組み合わせていた。イルザ・ヴァレンシュタインの最高傑作は確かに再生能力を有しているが、すぐに治るのは皮膚や筋肉だけの話だ。キーボルク大隊の

諜報班は、骨の復元もまた然りではないという情報を掴んでいる。

左発口の蹴りでとうとう立っていらなくなったサメ人間が一瞬とはいえ倒れ込むのを見た超ソフィアは、赤黒く腫れ上がった左脰脛口掛けて渾身の六発口を繰り出す。

奴の足が折れた！

超ソフィアが自分の足に粉碎を感じた直後、悲痛な叫びを轟かせたサメ人間は両手足をヒレに変形させて地中深くに潜行した。どうやら鮫林寺から撤退命令が出たらしい。

こうして恥ばかりが刻まれている表の歴史には、『ソフィア・マリューコヴァは生身でサメ人間を撃退した』という一文が書き加えられたのである。

◆一九四六年六月十八日

捕虜となったレベツカは、キーボルク大隊に占領されたカルヴァ村——戦車に踏み潰されて中身を絞り出されたチューブのようになった死体や、投降したにも関わらずキーボルクの二連チェンソーで両断された対独協力者達^{ヒューズ}があちこちに転がり、土も一切の例外なく暗黄色に変わっている——の、奇跡的に焼け残った家に閉じ込められていた。皮肉にもこの場所は昨日、彼女が囚われの敵を殺した場所であった。

「冗談じゃない。本当に勘弁してくれ……俺が何をしたんだ？　俺が、一休何をしたって言うんだ……？」

レベツカを無限の絶望に追い込んでいるのは外から聞こえてくる、ウォツカとソーセージで祝い合う敵兵の歌声にあらず。

「ソフィア・マリューコヴァは弁証法的プロセスの生きた手本よ。理解するのは

不可能……できるのはただ、信じることだけ」

たった今、自分の反対側に腰掛けたスペクターと直接話をしなければならないことだ。レベツカは『このソフィア』が五月二十六日に対面した人物とは違うと即座に見抜いたが、それ以上はもう考えたくもなかった。

「今回も随分鉛筆を折ったようね」

レベツカが数多くのソ連兵を殺めたことを褒め讃えつつ、マイクロビキニ姿の超ソフィアは持参したファイルから契約書を取り出す。

「メカソフィアシティ及びキーボルク大隊を代表してお願いする。一緒に戦ってくれないかしら？」

超ソフィアは「貴方を救いたい……だって貴方は、この戦争における最大の被害者だから」と続けるが、凄まじい頭痛を感じ始めたレベツカは何も返さない。ただ何もせず、話し掛けている側が諦めてくれるのを一心に願っていた。

「貴方は『見たくないものは見ない』人なのね」

契約書を下げてファイル内に戻した超ソフィアは、責める訳でもなければ残念そうでもない様子で呟く。

「合う訳ないわよね。だって私は『見たくないものしか見えなかった』人だから」元の自分が一体誰だったのか超ソフィアはよく覚えていないし調べるつもりもなかったが、蠟燭で弱々しく照らし出された地下坑道とその中に充満する強烈な臭気、燻された人体の一部、腐敗した臓物、糞尿、肉を齧った痕跡のある骨々は思い出せる。少なくとも見たいものではないがそれしか出てこない辺り、つまりそういうことなのだろうと彼女は考えている。

「どうしても私と関わりを持ちたくないというのならそれでいいわ。当然の権利だもの。でも、貴方がどれだけ私を忘れようとしても、私が貴方を忘れることはない」

それを聞いたレベツカは痛みに耐えつつ「病気だ。まともじゃねえ！」と唾を飛ばすが、超ソフィアは構うことなく続ける。

「貴方が少しでも向き合おうとすれば、私達——いえ、『私』という闇はここまで大きくならなかった。私は、貴方という光の影。貴方が輝けば輝く程に闇は深くなる……」

「ここまで来てまだ理解してないのかよ！ 何があろうと、俺はお前らと関わるつもりはない！ お前らが一方的に関わってきて、一方的にあれこれやってきただけじゃねえか。加害者が、一体何を被害者ぶってやがる……！」

激しく声を震わせるレベッカは大粒の汗を額に浮かべていた。人生で初めて経験する、どうやっても理解できぬ事態への圧倒的恐怖が彼女を支配していた。

「覚えておきなさいレベッカ……影はいつも貴方の足元に広がっている。そして影はいつも、すぐ近くから貴方を見ている」

超ソフィアが言い放った直後——より一層強まった頭痛でレベッカがその場に蹲った時、ドアを開けてキーボルク大隊の兵士達が入ってきた。

「コマルノからの迎えが到着しました」

「あら、早いわね」

兵士達は意外そうな声を漏らす影武者の前でレベッカを担架に乗せる。とあるやんごとなきお方からの要請で、囚われの彼女はシベリアの強制収容所ではなく白牢に^〇戻る手筈になっていた。

「レベッカ！」

超ソフィアは当然、本物のソフィア・マリューコヴァではない。しかし強力な自己暗示によって自分をソフィア・マリューコヴァと思い込んでいる者はここに至って、オリジナルならば間違いなくそうするであろう行動に出た。

「これから、ずっと応援しているからね！」

呪いの効果を永久に持続させる言葉を、外に運ばれていくレベッカに躊躇なく浴びせ掛けたのである。

終

【スタッフ】

キャラクターデザイン／温泉方太郎様・sigma様

クリーチャーデザイン・メカニックデザイン／sigma様

タイトルロゴデザイン・装丁関連／ナゴ様

監修・スペシャルアドバイザー／たわけものサポーターズの皆様

プロモーション協力／たわけものサポーターズの皆様

推敲協力／れど様・ミクト・アタイ・シヨクシャー・ワキスキー様・正太郎様・
M・鈴木様・たわけものサポーターズの皆様

資料協力／下呂子様・けるちゃ様・menatezz様・マリーノシュ様

【ナチス怪獣大決戦 超ソフィア 製作費調達クラウドファンディング支援者の皆様】

オカツチ様／かわ様／くずまんじゅう様

ケスイダ様／コハル様／コブラっち様

ジーク様（スタジオエルベ）／すなっち様

たっば様（小狸堂）／まきしま様／豆腐様

長谷川孝二様／不良将校様／真琴屋悠雪様

水無月ほたる様／IKE男様／inna17様

kurorari様／CTAJNH様／V8議長様

『ナチス怪獣大決戦 超ソフィア』

文:名無しの東北県人

イラスト:23/sigama/黒ノ樹

発行日:2021 年 3 月 19 日

発行:ウツテンカイ(thkjworks@gmail.com)

印刷:株式会社 緑陽社

※本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部/全部を無断で複製・再配布することを禁じます。

※この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、地名等とは一切関係ありません。

※また本作は『サメ人間 0』～『サメ人間 3』までの世界観をベースとした上で一部設定を変更、時系列もリセットの上再スタートした新規シリーズの六作目となります。